

木曾川文庫



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
今回は水郷の町・海津郡平田町を特集。
高須輪中の北部に位置する平田町の歴史と現状、
現在進行形の事業をクローズアップします。
特集宝暦治水第四編ではその遺跡と顕彰活動を紹介しています。

INDEX

ふるさとの街・探訪記《平田町》

■人と自然が共存する町
オリジナリティあふれた町づくりを目指して

AREA REPORT

■緑豊かなふるさとづくりを目指して、
着々と実施されるリバーフロント計画

気ままにJOURNEY

■時の流れを越えて、祈りの人波が続くきつね参道

歴史ドキュメント

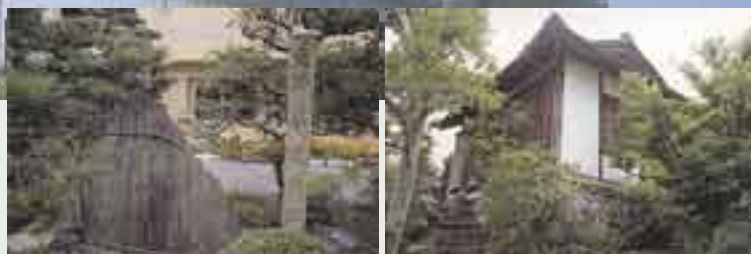
■240周年を迎え、宝暦治水の偉業をさらに未来へ

TALK&TALK

■丸山幸太郎氏が語る宝暦治水

民話の小箱

■大池の人柱



人と自然が共存する町

オリジナリティあふれた町づくりを目指して

坦々と広がる田園風景。

石積みと白壁のコントラストが美しい水屋。

木曾・長良・揖斐の三大川に育まれた平田町は、典型的な輪中地帯。

水の恩恵を受けながらも、洪水と闘いながら、地味豊かな穀倉地帯として成長を遂げました。現在では、「人と自然が共存する町」を目指して、多彩な活動を展開しています。



● 平田町の概要と地形

岐阜県の南西部、海津郡の北部に位置する平田町。高須輪中の北部を占める同町は、東は長良川を隔てて羽島市、西は揖斐川を隔てて養老郡養老町、北は大樽川を隔てて安八郡輪之内町と接し、自然堤防の微高地と低湿な後背湿地からなるデルタ地帯です。

昔から水害のため苦難を強いられてきましたが、近年、治水工事と排水施設の進捗により、わが国屈指の穀倉地帯の一部をなしています。

町の中心地今尾は揖斐川の船着き場として発展してきた所で、今尾の左義長と三大稲荷の一つといわれるお千代保稲荷は全国にその名を馳せています。



今尾渡し道標

昭和三〇年の町村合併による地方自治体の改革に伴って、旧今尾町と海西村が合併し、平田町が生まれました。宝暦治水にゆかりある同町は、薩摩藩総奉行平田朝負の名前をいつまでも語り伝えていきたいという願いとともに、青く豊かに広がる濃尾平野の米

● 戦火を浴びる今尾城

文明年間（一四六九～一四八七）になると、美濃国守護代斉藤氏の家臣・中島三郎太夫重長



高須輪中略図



平田町空撮

によって、今尾城が築城されました。その後四代に渡って居城しましたが、四代重行が織田信長に追われると、高木彦左衛門（江戸期の水行奉行）や森寺清右衛門が相次いで入城。天正十二年（一五八四）小牧・長久手の合戦に今尾城主森寺氏は豊臣方に参戦し、徳川家康・織田信雄連合軍と一戦を交えましたが、織田勢によって城下は焼き払われ、敗戦という終末を迎えています。その後も関ヶ原の合戦の前哨戦の舞台として戦火に見舞われました。これらの戦から、この地域が西南濃地区の要衝の地であったことが伺われます。

● 近世の支配機構と治水事業

太平の江戸時代を迎えると、同町の支配機構は複雑に交錯します。野寺、岡村を初めとする六カ村は高須藩徳永氏の所領、勝村、仏師川村等十カ村は幕府領、今尾村、土倉村等六カ村は尾張藩領など、こうした支配機構は時代が進むにつれ変化しています。同じ高須輪中に交差する支配機構は治水事業において、大きな影響を与えました。つまり、堤防の築造や河川改修による利害が各領地間で一致しないため、抜本的な解決策が得られなかったためと考えられています。とはいえ、水害常習地帯であった高須輪中では、様々な治水事業がこの時期行われています。

元文三年（一七三八）、美濃郡代滝川小右衛門は幕領村々の元禄元年から元文二年に至



旧平田町役場

る過去五〇年、半世紀に亘る公儀普請について調査し幕府に報告しています。調査結果によれば、当町域において洪水等の被害に見舞われなかったのは、六年のみ。約四十年の間に、全村が大なり小なりの被害を被っています。寛永十二年（一六三五）四月の長良川の洪水、次いで同年八月の再度の洪水により堤防が決壊、長さ約二万間の堤防が国役普請として修復されています。宝永元年（一七〇四）には流れる水の障害となっていた民家や竹藪などを撤去する大取払い普請が行われ、同町域においても堤外の猿尾、雑木などが百姓役として残らず取られました。宝暦治水において同町域では、大樽川の洗堰等が築造され、以後、天明 寛政、文化、文政 天保、嘉永、万延と、大名による御手伝普請（御手伝金供出）による工事が洪水の度に行われています。

● 町村制施行と後の河川改修

明治期になると藩籍は奉還され、同町は明治四年に今尾県、笠松県、名古屋県、同年十一月には岐阜県に所属。同二年には町村制が施行され今尾町が成立、同三〇年には海津郡が建置され、今尾町に七カ村が合併、海西村も同時期に成立しています。明治二〇年には、三川分流を目的とした明治改修が施行され、同町では大藪、勝賀間に総延長一九〇間の大樽川締切堤が完成。ヨハ



豊かな田園風景

どころの町を表すという意味で町名を「平田」と名付けたといわれています。

● 平田町のあけぼの

何十万年の歳月に亘り、木曾・長良・揖斐の三大川が絶えず土砂を堆積し、海であった所を陸地化させたもの。太古の時代は、低湿な沼地であったと考えられています。

昭和三年、海津町平原では平安初期の住居跡が発掘され、その北に位置する平田町は、洪水の心配のない三角州の高所に畑を耕し、周囲にささやかな堤を築いた集落が形成されていたと推測されています。

中世に入ると新田開発が行われ、大樽荘、郡戸荘、長岡荘などの荘園が存在したと伝えられています。宝生院文書によれば、延文五年（一三六〇）八月、大樽荘・勝村郷で堤三カ所が切れ、多くの農民が逃散、田畑は荒廃しましたが、勝村の観音寺住職の祈祷によって堤の修復が成功し、田畑も次第に回復したと記されています。この記録に見られるように、この地域の歴史は新田開発と堤防の築造、そして水害との闘いのあくなき繰り返し。この闘いが後の肥沃な穀倉地帯を生み出しました。

仏師川村の新田開発

平田町の新田開発の歴史の中で、その由来が明らかなのは仏師川新田（大樽川南の集落）のみ。明暦年間（一六五五～一六八八）、代官平岡四郎兵衛が幕府支配の節、車戸村から仏師川村まで二百間に堤防を築き堰き止めて新田を開発。明暦二年（一六五六）平岡代官の検地で、高三石二斗五升一合を高請しました。

しかし問題が起こったのは、その直後のこと。新たに築造された堤防の水番をどの村が負担するか、とのことでした。水番とは取水口である机樋が順調に稼働しているかを見張ること。当時小さな集落であった車戸村や仏師川村にとって二百間の堤防の水番はかなりの負担であったのです。そこで平岡代官は脇田村役人を召し寄せ、「其の村は郷中堤のない村方、遠所金を出すか、新堤自問の水番をするか」と尋ね、脇田村は水番を選び、それ以来車戸村に代わって百間の水番を勤めました。しかし、この先例を破り、水番の所替えが車戸村に申し付けられたのは明和六年（一七五八）のこと。もってのほど、堤方役所へ訴え出たのでした。この問題の決着は未だに明らかにされてはいませんが、仏師川新田の開発は思いも寄らぬ方面へ尾を引いて、多年紛糾が続きました。

参考文献

『平田町歴史』 上・下巻
『平田町歴史』 史料編
『新郷土海洋』 岐阜県海津郡教育振興会編

緑豊かなふるさとづくりを目指して、 着々と実施されるリバーフロント計画

水と闘い、水とともに生きた輪中地帯。かつて、田舟が行き交った水郷風景は、歳月の流れとともに徐々に姿を消していきました。昭和五五年から開始された高須輪中総合整備計画、平田町第三次総合計画など、輪中ならではの景観を生かしながらも、「日本農業の先進のモデル」を目指し、多彩な事業計画が着々と進められています。



脇野揚水機場と白山公園



高須輪中総合整備計画

高須輪中の半分以上の地域は海拔0m以下の低湿地であり、恒常的な地盤沈下地帯。その大部分が水田からなる耕作地であり、地味豊かな米作地帯です。

輪中地帯の農業は、これまた水との闘いであり、堀田、田舟による農作業等は、人力中心のものでした。しかし、掘潰れ等の埋立て、区画整理、用排水の整備等の土地改良事業が行われ、近年は、大都市近郊農業の担い手として成長を遂げています。

この農業構造の変化により土地基盤の再編整備は急務となり、昭和五五年「高須輪中総合整備計画」が策定されました。

その基本構想は①用排水の分離と乾田化②道路計画の見直しと拡幅③ほ場の大型化④農業生活環境の整備など。この構想に基づき様々な事業が着手されましたが、国営灌漑排水事業「長良川用排水地区」では輪中内の三〇〇〇haを対象に農業用水の安定供給並



トーカイくん

「シラベール」で水質管理

建設省では長良川の環境保全を目的に、水質自動監視装置（水質監視ロボット）六箇所（うち一箇所は改造）を建設、平成六年四月に竣工式を実施しました。

長良川の水質を三五五二四時間体制で自動監視できる自動装置は周囲にマッチしたデザイン。地域の皆様方に親しまれるように、その名前を一般の方々から募集し、決定いたしました。

▼六カ所全体（システム）の名称

- 『シラベール』
- 名付け親 安藤敬子さん（小学生／安八町在住）
- ▼六カ所それぞれの愛称
- 『イナちゃん』
- 損斐・長良大橋自動監視装置
- 『イセくん』
- 伊勢大橋自動監視装置
- 『ナガラちゃん』
- 長良川大橋自動監視装置
- 『トーカイくん』
- 東海大橋自動監視装置
- 『ナンノーちゃん』
- 南濃大橋自動監視装置
- 『ヤーブくん』
- 大藪自動監視装置
- 名付け親 小西千祐さん（主婦／岐阜市在住）

びに排水改良の基幹的設備の整備を目的としています。従来この地域の用水は、長良川から取水する勝賀揚水機場、揖斐川から取水する中江取水口及び逆潮を利用した取水の三系統でした。しかし、施設の老朽化、逆潮利用による取水が困難になったため、新たな用水事業を計画、その概要は新大江揚水機場、中江揚水機場の設置となっています。



大樽川堤防の修景計画

平田町では第二次総合計画に基づき、現在、大樽川堤防の修景事業に取り組んでいます。この事業は輪中という遺跡の保存・継承を目的とするもの。明治三三年（一九〇〇）、明治改修に伴い大樽川は廃川になりましたが、当時の面影を残す輪中堤の修景事業に着手、勝賀から今尾に至る約6km間で工事は進められています。



勝賀中島公園破堤跡

この事業は堤防全体の植栽整備と合わせて中段にサイクリングロードを整備し、長良川サイクリングロードと揖斐川を結ぶもの。お千代保稲荷がある三郷、須脇地内においても、大樽堤を軸とした輪中公園が計画されてお

り、平成六年にはバターゴルフ場、同七年には多目的ドームを建設するなど、参拝の人々に憩いの場を提供する計画となっています。

ひらた・シンボル親水公園と全町快適公園都市づくり

平田町には先述の農業用水を供給する長良川西用水支線、長良川東用水支線が通っていますが、町を縦断する東用水支線も、国の事業により従来のオープン水路から暗渠パイプ用水に平成五十六年をもって改修されることになりました。

この暗渠パイプ用水の敷地を、岡から西島地内の県道成戸線に至る区間で、用水管理道と合わせ残地をサイクリングロードとして活用する計画です。平成六年度を初年度とする平田町第三次総合計画の重点プロジェクト「ひらた・シンボル親水公園と全町快適公園づくり」の中でも重点整備事業として位置づけられており、三郷の輪中公園を拠点に輪中堤防、用水路敷地、基幹排水路堤を利用した町内回遊コースを設定しています。

水郷地帯特有の水との闘いの歴史、史跡、施設を訪ね、のどかな農村風景を満喫するサイクリングロード。このステージは未来を担う子どもたちの情操教育の場として、都市住民と農村住民の共有財産として、整備活用されています。



野寺・バイスクルパーク



野寺・長良川サイクリングロード

遊んで学べる さぼう遊学館 南濃町に六月オープン



岐阜県の八二％は山地で占められ、海拔三〇〇〇mの飛騨地方から海拔0mの輪中地帯まで変化に富んだ景観を織りなしています。しかしながら急峻な地形は、古来から山岳では土石流災害を、低湿地では河床の上昇による河川の氾濫など、深刻な被害をもたらしてきました。養老山系から揖斐川に流入する土砂はその代表的なものであり、明治改修では海津郡南濃町の般若谷などに巨石積堰堤や山腹工が施工され、以後近代砂防の幕開けとして、現在まで砂防事業は進められています。

岐阜県土木部砂防課は、養老山系・羽根谷周辺の自然と砂防施設そのものを学習教材として、「砂防学習ゾーンモデル事業」を進めており、その一環として南濃町奥条に「砂防学習資料館」（愛称※さぼう遊学館）を平成六年六月にオープンしました。

当資料館の南隣には生活環境保全林「月見の森」もあり、養老山系南端には木曽三川公園、船頭平閘門、治水神社があり、南濃地方の治山治水の総合学習ゾーンとなっています。

時の流れを越え、 祈りの人波が続くきつね参道

風にたなびく青い稲の波。
揖斐の川面に燦々と降りそそぐ夏の太陽。
人も、鳥も、魚たちも、自然の中に溶け込んでいく。
自然と歴史が交錯する町・平田町。
美しい水郷の町に、
魅惑の時はゆつくりと流れているようだ。

野辺をわたる狐の嫁入り

宵つ張りの鴉がねぐらに帰るころ、妖しげな光りが闇夜を照らしはじめた。チロチロと揺れる光りの帯は、狐火なのであるうか。野辺をわたる妖火は天空へ舞い上がったかと思うと、赤い光りの尾を曳きながら山の端に姿を消した…。



もともと狐の嫁入りとは、野や山の裾を一列の火が夜更けを行くのを例えた言葉。この狐火が隊列をなした田畑は豊作続きだと、信じられていました。長年病床に伏していた少女が、狐の嫁入りを見たとたん、無事平癒したという伝説も残されているように、妖火の伝承は、人々の祈りから生まれ、願いを伝え、記したもののなのでしょう。

五穀豊饒、家内安全、商売繁盛…。人々のささやかな祈りは、祠を建て、合掌し、やがて稲荷信仰へ結びついていったのでしょう。坦々と広がる田んぼの中のお千代保さん。そんなルーツを探して、旅に出かけることにしました。

源氏の御霊を 今に伝えるお千代保稲荷

東名阪自動車道・弥富ICを降りて北へ一路。木曾・長良川を渡り夏の光りを浴びてキラキラと輝く長良川に沿って車を走らせていると、坦々と広がる青田が見えてきます。川風に揺られて小首をかしげる青い稲穂。紅薫る來竹桃。赤とグリーンの鮮やかなコントラストは、一幅の名画。うつすらと霞む養老山脈を背に、赤い大鳥居が見えてきました。

平田町須脇にあるお千代保稲荷は、京都の伏見、愛知の豊川と並ぶ三大稲荷のひとつといわれている所。その由来も深く今から千年ほど昔のこと。源義家が、その子二郎義隆（八神毛利の始祖）に、自らの画像、源氏の宝剣、御霊を授け「千代に保て」と命じたことに端を発するといわれています。その五百年後、伊勢からこの地に移り住んできた義隆の子孫、森八海が三種の神宝を祀り、森家の屋敷神として祠を建立したと伝えられています。森八海を開祖として長い歳月を歩み始めた千代保稲荷社。今でこそ「お千代保さん」と親しまれているお千代保稲荷も、その昔は森



お千代保稲荷のお狐様

熱い人いきれが渦巻く門前町

お千代保詣のもう一つの楽しみは、夏祭り



門前町

無念の涙を呑んだ 黒田唯右衛門の墓

薩摩義士が命と名譽を賭けて行った土着治水。中でも平田町を流れる大樽川の洗堰築造は難工事中の難工事。暴れ狂う川を相手に薩摩義士は歟をふるって工事を行いました。しかし荒れ狂う自然の前にすら、人間の力はうげけなもの。遅々として進まぬ工事の責任を取り、あるいは幕府に抗議して五二名もの義士が割腹しています。黒田唯右衛門もその一人。故郷薩摩に帰ることなく、平田町・常栄寺に葬られました。



常栄寺・薩摩義士の墓

池、西は揖斐川の清流を隔てて養老山脈を一望できる地に、春岱の生前を記す碑文は残されています。織部、志野、古瀬戸、御深井…。様々な伝統を踏襲しながらも、独自のロクロ技術と絵付けによって春岱風を醸し出した名工。九代城主正美と春岱の出会い、江戸後期、陶芸の世界に新風を巻き起こしていたようです。



今尾・春岱窯跡

今尾城主と加藤春岱
お千代保稲荷から南西へ車で十分余り。今尾城の碑文が、大樽川沿いの今尾小学校の校庭に残されています。室町時代末期、この地に築城された今尾城は、戦火や時代の移り変わりによって、様々な城主を迎えています。江戸時代になると竹腰氏が三万石を拝領。天保八年（一八三八）に九代竹腰正美が家督を継ぐと、尾張の陶工加藤春岱を招いて、領内鯉池に陶器窯を築いたといわれています。九代正美は茶の湯をたしなみ、蓬月と号した文人。侘び・さびを愛した繊細な感性は、陶器の世界へもめり込ませたのでしょう。江戸後期、瀬戸を代表する随一の巨匠といわれた春岱は、三年余り今尾に暮らし、藩主の手厚い庇護の下で自由に楽しみながら、実に悠々と作陶に打ち込んだといわれています。茶碗、鉢、壺、香炉…。この間の作品は数知れず、春岱を代表するものばかり。東に総

気ままにJOURNEY

の縁日を彷彿とさせる門前町。家の軒が鳥居に差し込んでいるのか、鳥居が家の屋根にかぶっているのか。月もうでと呼ばれる月末にもなると、人いきれで歩くこともできないほどの賑いです。お父さんは坊やを肩車して、お母さんはお姉ちゃんを抱きかかえるように…。

漬物、草餅、信楽焼の狸に、宝舟などなど、軒と軒が重なり合うように店屋はひしめき、店屋がとぎれば、その先はどこまでも続く屋台の列。中でも門前町の看板は、川魚料理です。水郷地帯・平田町にふさわしく、ナマズ、モロコ、コイ、ウナギなど、ご自慢の川魚を食べさせてくれるとか。参拝後の楽しみは、何といってもグルメなり。敬虔な善男善女も、どうやらこのグルメの魔力には、勝てないようです。子どもに腕を引つ張られ、奥さんにせがまれて、家族連れが楽しみに食事する風景は通りすがりの他人が見ても、なんとも心なごむものです。

平・田・町・の・歳・時・記

勝賀の大池まつり 《勝賀 大池神社周辺》

—八月十日—

今から百数十年前、村の氏神様と若宮様を一箇所に集めて建立した大池神社。一箇所に集めたことが崇りを招き、大池の主の白蛇だと考えられていたことから、例年八月、白蛇様がお怒りにならぬようにと、賑やかなお祭りが始められました。大池に浮かぶ赤提灯と盆踊り、仕掛火花はこの町の風物詩。夏の暑さを忘れる楽しいお祭りです。



高田の甘酒祭り 《高田 八幡神社》

—十月十日—

江戸時代中期から行われている、高田・八幡神社の由緒あるお祭り。太陽が地平線から姿を現すと同時に、甘酒を掲げた行列が鳥居をくぐり、神殿に甘酒が供えられます。参拝客にも甘酒はふるまわれ、人々の頬が赤らむころ、祭りはクライマックスを迎えます。一町指定無形文化財—



交通のご案内

- 岐阜県羽島I.C.、岐阜羽島駅より共に……………約11km14分
- 大垣I.C.より……………約10km13分
- JR大垣駅より……………約16km26分
- 東海大橋より……………約9km11分
- 弥富I.C.より……………約22km26分
- 桑名東I.C.より……………約26km35分

特 集
宝暦治水
第 四 編

二四〇周年を迎え、 宝暦治水の偉業を さらに未来へ

人々の悲願であった三川分流。
乱流し暴れ狂う大河を前に、
英知を結集した判断も、未完のまま、
明治という時代へ引き継がれていた。
しかし、その勇氣は、その魂は、
二四〇年を経た今日でも、語り継がれ、
受け継がれている。
水との闘い、自然との共存――。
それは、今を生きる人々の果てしなき命題でもあるようだ。

三川分流と宝暦治水

三川分流の必要性が明確に現れるのは、延享三年（一七四六）、高須輪中四〇カ村の庄屋が連名で願い出た訴願においてでした。村民の困窮を訴えた願書は、木曾川や揖斐川などの河道の現況（各河川の河床の高低差や堆積土砂の問題等）を訴え、その上で「木曾川・揖斐川を海口迄分通」する方策を明確に提案しています。これは、慢性化する水害に苦しむ村民が、長年に渡る河流の観察と出水状況についての経験的判断に基づいて衆知を集めて下した結論であり、三川分流計画はここに見るかぎり、村民の血と涙のにじむ英知の結晶でありました。

ともあれ、薩摩藩島津氏による宝暦四年（一七五四）から翌宝暦五年の御手伝普請は、長く懸案とされた木曾川水系下流域の治水問題をひとまず解決しました。中でも高須輪中や揖斐川下流部の治水状況は、大きく改善されたといえます。



大樽川流堀絵図

しかしそれは、水害の根絶には至りませんでした。幕府領、尾張藩領、中小の大名領、旗本領が交錯する西濃地方の複雑な支配機構

が、三川分流を阻む大きな原因となっていたからです。
洪水を防ぐには河川敷の拡幅（引堤）が必要でした。しかしどの藩のどの村が河川敷を提供するかで、それぞれの利害が反発しあい妥協点を見いだすことができず、こうした要因は総合的な治水事業を不可能にしていたのです。

これを克服するためには金銭による土地買収が必要となりますが、懸案の三川分流はひとまず、ヨハネス・デレークによる明治改修を待たねばなりませんでした。

今なお残る工事跡

三川分流を目指しながらも、当初の目的を実現できなかった宝暦治水。その工事跡は、時代が進むにつれ、徐々に姿を消していきました。大水による破壊もその原因の一つ、明治改修の際の取り壊しも原因の一つだといわれています。

《石田の猿尾》

しかしそんな中でも、往時の姿をそのまま留めている遺跡があります。

石田の猿尾がそれです。猿尾は、誰が考案



石田の猿尾

並木は宝暦治水の史跡です。治水上最も難工事であった油島締切堤の上に故郷薩摩から取り寄せた千本の日向松の苗を植えたといわれています。それが成長して今では樹齢二百数十年を越える松林となっており、千本松原と呼ばれています。

しかし枯死や台風などによる倒伏で、一時は減少しましたが、その後順次補植することにも病害虫防除などが行われており、保全には万全を期しています。

堤防上に延々と繋る千本松原は、水と緑が織りなす歴史のモニュメント。無念の涙を呑んだ薩摩義士の偉業を、忘れることなく後世へ伝えてくれることでしょう。

千本松原

二四〇周年記念式典

今年は宝暦治水から二四〇周年を迎える記念すべき年。新緑がまぶしい季節に、海津町の治水神社で記念式典が開催されました。治水神社は薩摩藩総奉行平田鞆負を祭神として、昭和十三年（一九三八）に油島締切堤の付け根に建てられたもの。毎年春と秋には例祭が開催されています。

記念式典は春の例祭が開催される四月二十五日に、岐阜県薩摩義士顕彰会（会長・梶原拓岐卓知事）主催で行われ、遠く鹿児島県から薩摩藩主島津公の子孫島津修久氏など多くの方々が参列し、薩摩義士の遺徳を偲ばれました。

大きな犠牲を引き替えに成し遂げられた宝暦治水。しかし、あれから二四〇年を経た今日でさえ、水害を絶滅するには至りません。高度に発達した技術力を背景にしても、迫り狂う自然の脅威を前にすると、その力は微力なもの。木曾三川を擁する濃尾平野は無論のこと、この状況は薩摩義士のふるさと鹿児島県でも同様です。

宝暦治水ゆかりの地を訪れて。 文化財と共存する治水事業を願う

鹿児島県薩摩義士顕彰会長 島津修久氏



今年、鹿児島県薩摩義士顕彰会の会長に就任したのですが、二百四十年の祭典に参拝の

事実、昨年鹿児島県を襲った一連の大雨は、例年にない大きな被害をもたらしました。こうした災害は、私たちに改めて警告を発し、自然の猛威を知らしめています。万一の災害に備えた治水事業の必要性。これは宝暦治水から二四〇年を経た今日でも、同じ課題なのでしょう。



業。これが現代人に課せられた

テーマ、最大の課題であるといえましよう。



240年記念式典風景

した。二四〇年を迎えた今年、鹿児島県薩摩義士顕彰会では機関誌「薩摩義士」の発行を始めました。また、義士のお墓と供養塔の建立を計画しています。岐阜の各地に埋葬されているご遺骨を、安置する場所がなくては…。募金を募って今年中にも完成させたいと思っています。

過去の遺業これを顕彰し伝えていくことは、なかなか大変なことです。宝暦治水も同様、遺跡を大切に保存しながら、尚且、治水もしていくというのは現代人の命題なのではない。是非、治水事業も共存共栄といえますか、文化財とか、環境とか、自然とか、共存を考えながら開発していく。それが現代人の知恵なんだろうと思いますが、なかなか総論ではそうでも、各論では大変なところですね。

参考文献

『木曾三川とその流域と河川技術』建設省中部地方建設局 一九八八年
『木曾三川流域誌』建設省中部地方建設局 一九九二年
『水の文化情報誌FRONT』一九九一年九月

機会を得ましたことを嬉しく思っています。私の祖先島津重年を初め平田鞆負が心血を注いだ地ですからね。昨日は薩摩義士がお祀りしてある清江寺や江翁寺など、長年の懸案だった参拝を終えまして、感無量です。御手伝普請を幕府から持ちかけられたとき、重年は受命するか、拒否するかで随分悩んだと思います。最終決断を下すのは殿様の役目ですから。決断したことによって、どういう結果が出るかというを見通した上で決断する訳ですから。拒否すれば戦争になると、どちらを選ぶかということに立たされたと思う…。そういう先人たちが残した遺徳や功績を、鹿児島では知らない人も多いですね。ですからこういう機会に、二四〇年という節目に鹿児島の人を知ってもらいたい。特に若い人たち、青少年に知ってもらいたいということなので、そういう関係の交流も盛んになってきま

宝暦治水の効果とその影響

相次ぐ洪水、悪水の影響…。
宝暦治水でさえ、水害の抜本的な解決には至りませんでした。
しかし、木曾三川流域に暮らす人々は、
自普請組合の結成や堀田の造成など、
暮らしの知恵を結集して、水害に立ち向かっています。
そんな人々の足取りを、
岐阜県歴史資料館長・丸山幸太郎先生に語って頂きました。



丸山幸太郎氏
プロフィール
岐阜県歴史資料館長
地方史学会評議員、岐阜史
学会幹事、岐阜郷土資料協
議会幹事。
岐阜県内の小学校の他、岐
阜県史編集室主任、岐阜県
教育委員会指導主事、文化
課課長補佐、本巣小学校校
長を歴任。この間、岐阜県内
の揖斐川町史、池田町史、
南濃町史、輪之内町史、海
津町史等、郷土史や日本農
業全書24を執筆。県史編集
室では、「治水・用水・輪
中」分野を担当。「近世美
濃の治水制度」など輪中史
に関する論文多数。



明治初年の牛牧輪中の村々

により、洪水時の木曾・長良両川の水をそれ以前より受けにくくなり、連年洪水のたびに発生していた水害が減少しました。宝暦十四年（一七六四）四月、石津帆引新田ほか十三カ村が多良・笠松御役所へ出した「川通存寄書」（『海津町史史料編二』五〇六頁収載伊藤文書）によれば、大垣から油島新田まで十里余・高十万石余の村々は、「戊辰御普請」（宝暦治水）が行われて「水損相止ミ申候」とまで述べています。

宝暦治水の問題点

しかしながら、美濃全体の水害は、宝暦治水後も減ることはなく、とりわけ大樽川洗堰の築造などで水吐けが悪くなった対岸や上流の地域では水害がひどくなり、効果はなかったという声があります。たしかに、宝暦治水

揖斐川下流域の水害減少

薩摩藩による宝暦治水は、木曾三川分流を目指す画期的な大治水工事でした。この工事は、宝暦三年（一七五三）八月の洪水で崩壊した堤防を修繕する水害復旧工事（主に揖斐川下流域）、従来、村々が自普請していた悪水（排水）坎樋築造、百姓個人の土地改良である田畑掘上げ（堀田）工事なども含んでいました。それゆえに、一三〇を越える普請場の大小の工事が完成したことによって関係村々の農民や領主がたいへんな利益を得たといえる。特に、揖斐川下流域は、油島新田・松ノ木村間の締切堤や大樽川洗堰の築造

江戸時代の岐阜県における水害発生件数				
年 代		水害件数		合計
		美濃	飛騨	
1601～	10	11		11
11～	20	18		18
21～	30	5		5
31～	40	5		5
41～	50	6		6
51～	60	10		10
61～	70	5	2	7
71～	80	15	1	16
81～	90	13		13
91～	1700	8	2	10
1701～	10	9		9
11～	20	11	2	13
21～	30	8	2	10
31～	40	16	4	20
41～	50	5	2	7
51～	60	12	1	14
61～	70	17	3	18
71～	80	28	4	32
81～	90	11	5	16
91～	1800	14	3	17
1801～	10	12	5	17
11～	20	13	2	15
21～	30	12	2	14
31～	40	17	2	19
41～	50	37	1	38
51～	60	24	1	25
61～				
計		352	46	398

『木曾三川流域誌』327項の原昭午氏作製表による

が目指した三川分流は中途半端であり、不十分なものでした。木曾川については、当初四割の水を佐屋川へ分流するという計画でしたが、尾張国村々の抵抗が強く、佐屋川の水行を良くする洲渡えなどの水行普請を実施するに至らず、分流工事は弱められました。また、桑原輪中以南では、木曾・長良両川は、合流にまかせたまま、抜本的な分流は、明治の木曾川改修をまたねばりませんでした。宝暦治水の最大の工事であった油島締切堤築造も、当初計画より三九〇間（約七〇〇m）も短かく、中明き部分が大きく、大河木曾川の水もかなりの部分があいかわらず揖斐川へ流れ落ちていました。また、大樽川洗堰も、完成した宝暦五年の五月末の出水で破損し、効果が減少しました。宝暦治水には、こうした問題がありました。宝暦治水には、こうした問題がありましたが、わずか一年に満たない工期に、画期的な治水事業が行われたことは誰しも認めることです。

江戸時代後半期の水害の頻発の原因は、流域における新田開発や輪中囲堤の発達により、出水時の遊水地が減少し、流路が固定化する一方、流出上砂の堆積により川洲が増えたり、川床が高くなったたりするなど、河川状況が変わってきたことへの対応の遅れということが、第一に挙げられるべきでしょう。いかに宝暦治水が画期的なものであっても、宝暦治水と当時の治水問題の根本的解決とを結

び合わせて考えることはさしひかえるべきでしょう。

輪中の組織化が進む

木曾三川流域の治水史の上で、宝暦治水は揖斐川下流域の治水等に、特筆すべき効果を挙げましたが、また一方その後の治水にも大きな影響を与えました。

その一つは、木曾三川流域の治水共同体としての輪中が連合して、大川通の堤防の修繕や補強を請願したり、輪中の囲堤を築廻したりするなど、輪中の組織化を強め、治水体制を前進させました。これは、宝暦治水後、ただちに油島締切堤と大樽川洗堰の自普請組合が結成されて、宝暦治水の遺産を保全し、さらに施設を充実していく体制がとられたことが契機になっているといえます。また、宝暦治水による河川の水位の上昇に対応するため、輪中が連合して、より広域でより強力な組織体となって、治水普請の請願活動をしたり、輪中の自普請を実施したりするようになったという場合もありましょう。

後者の典型例としては、長良川流域の複合輪中牛牧（五六）輪中の形成と組織の強化を挙げることができます。本巣郡南部の悪水が五六川、犀川、中川等を通し、牛牧東部から祖父江付近に集中していました。出水時には、大河長良川の水が祖父江から低い五六川通へ逆流して水害を発生させ、流域村々を苦しめていました。宝暦治水直後の宝暦六年（一七五六）、幕領本田代官川崎平右衛門の奔走を得て、牛牧の五六川口に逆水留門樋の築造許可があり、ただちに門樋が築造されるところに、五六川両岸堤の補強工事が行われました。五六川流域村々の宿願がここに達せられましたが、これは、宝暦治水による長良川の水位の上昇への対処ということが、実現のものになっていきます。五六川口逆水留門樋築造、両岸堤の補強以後、五六川流域・八カ村は牛牧輪中を組織し、やがて東部の穂積、別府、只越、本田の各輪中も合併し、十六カ村組合へと組織を拡大し、治水共同体としての連携を強め、活動を展開しています。

堀田の普及



牛牧門樋築造と堀田の復旧に働いた川崎平右衛門を祀る川崎神社

木曾三川下流域の低地では、水吐けの悪い水田の土地改良のために、水田の一部を掘りつぶし、掘った土を盛りあげて、植え付け面を高くした堀田が、昭和三〇年代まで広がっ

ていました。この堀田は、宝暦治水のとき、その代表的な工事の一つ大樽川締切（洗堰）工事によって、悪影響を受ける対岸の桑原輪中村々で実施されたことが発端となって普及しました。それゆえ、堀田の普及は宝暦治水の大きな影響の一つといえます。この堀田を提案したのは、美濃郡代配下の幕領本田代官川崎平右衛門です。川崎代官は武蔵国の農民出身者ですが、大岡越前守支配下において武蔵野新田開発等で活躍し、寛延二年（一七四九）美濃へ赴任し、各地の治水や地方行政の諸問題解決にめざましい働きをしました。川崎代官は、宝暦三年、宝暦治水の計画にかかわる村々のうち、不利益を受けるといって反対する村々の実情を調査し、計画に賛同するよう説得に当たっていました。大樽川締切（洗堰）については、一二〇年来関係村々が出願し、代々の美濃代官（郡代）が奔走しましたが実現しませんでした。その最大のネックは、対岸の桑原輪中村々の反対でした。川崎代官は、桑原輪中村々に掘上げ田普請願を出願させ、それを宝暦治水に組み込んで実施するように手配をしました。そのと

き、桑原輪中村々に、領主である尾張藩には願い出ないよう指示しています。実効が挙がる前に計画がつぶれるのをおそれたためでしょう。

耕地の三割とか四割とかを掘りつぶしてしまつてということ、農民にとっても、領主にとっても、決断し難いことです。宝暦治水の一部として、小敷村などで六四町歩余の「掘上げ田」普請が行われ、それまで収穫が皆無に近かった水腐れ田がよみがえり、年貢納入ができるほど生産性が上がるようになりました。これを見聞した他の輪中村々に、堀田が急速に普及したことはいうまでもありません。

このほか、宝暦治水の影響としては、諸大名の御手伝普請が工事終了後工費を分担するお金御手伝となり、直接各藩士が現地において工事の進捗に当たる姿はなくなりまして、それだけに、遠い薩摩藩の武士たちが汗を流し、命をかけて治水工事に取り組んだという史実が、流域民の水と闘い続ける情熱を支えてきたとすれば、それも有効な影響の一つといえます。

幕藩制解体過程の農村 近世美濃の農業と水の問題 丸山幸太郎著 犬養書房発行

BOOK LAND



幕藩体制の解体過程と地主生成・展開を著した一冊。近世後半期、農業生産力の上昇、商品生産、流通の展開を背景にした農村社会の変貌を美濃国中心に論述している。副題にも掲げられているように、美濃は水とは深い関わりを持つ土地柄。木曾三川の土砂が堆積し形成された扇状地帯、洲を開墾し輪中堤を築造して形成された輪中地帯など、木曾三川下流域における水の問題は、農村社会の展開とは切り離せない課題。本書では、新田開発や用水問題、悪水処理に関する論議を、大垣輪中や福束輪中や高須輪中など、地域別や絞り込みに言及している。農村の生成過程と幕藩体制の解体過程が比較考察された名著である。

小説「乱流」著者 三宅雅子さん 土木学会 「出版文化賞」を 受賞



明治の我国の治水築港事業に足跡を残したデレーケの生涯に光をあて、土木技術者が国士造りに大きな役割を果たしてきたことを、その時代背景とあわせてわかりやすく紹介しました。その内容は、人々の土木に対する興味と理解を広げるとともに、土木の歴史や国際性という面からも多くの読者に感動を与えました。その功績に対し、土木学会「出版文化賞」が贈られました。

民話の小箱

大池の人柱

―勝賀の水害を救った若宮さま―

今から一七〇年ほど昔、文化十二年（一八一五）の七月のことです。

暴れ狂う大嵐は勝賀の堤防を壊し、

大水が辺り一帯の村すべてを呑み込んでしまいました。

堤防は何度堰き止めてもすぐに押し流されてしまいました。

進まぬ工事、水浸しの田畑。

途方に暮れる村人達の中から、

「堤防が崩れるのは川の神様がお怒りになつとるからじゃ。」

と言う不安げな声がこぼれます。

こうしている間も川はどんどん水を増してゆきます。

川の神様の怒りを沈めるために、とうとう人柱をたてることになったのです。

しかし、誰一人として人柱になろうとする人はいません。

困り果てる村人達をみかねて、庄屋の伊藤佐平治は口を開きました。

「この中でつぎのあたった袴を履いている者が、人柱になることにしましょう。」

全員の袴を調べてみると、

つぎがあてである袴を履いていたのは佐平治ただひとりだけ。

人柱になることを密かに決意していた佐平治は、

村を救うため

工事の完成を祈りながら、うすまぐ川の中へ消えて行きました。

やがて、川はもとの穏やかさを取り戻し、

村の田畑は豊かな恵みを受けたといえます。

その後、この災害によってできた「大池」のそばに

村人達の手で佐平治を奉ったお社が造られました。

平田町勝賀の神明神社境内に建てられた「若宮さま」。

この小さなお社には今も、村人達の平穏への願いと感謝が息づいています。



●木曽川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分

《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》 無料

《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曽川文庫

〒496 愛知県海部郡

立田村福原

TEL(0567)24-6233



編 集 後 記

昨年の秋から四回にわたって連載した宝暦治水、いかがでしたでしょうか。取材を繰り返す日々の中で、江戸時代の治水事業の難しさを実感しています。濁流に向かった薩摩義士の勇気、努力…。この偉業から改めて治水とは何かを学び、未来の治水のあり方を考えていきたいと思っています。次回からは三川分流を実現した明治改修をシリーズで特集する予定です。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曽川文庫まで。

Vol.11 編集にあたっては、平田町役場をはじめ多くの方々にご協力をいただきました。ありがとうございます。

次回は大垣市を特集します。ご期待ください。

(表紙写真 上：今尾橋 中央左：今尾城跡
下：お千代保稲荷 中央右：水屋)

『KISSO』Vol.11 平成6年7月発行

発行：建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 〒511三重県桑名市播磨81

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル)

TEL(0594)24-5715

TEL(052)565-1976